

Title	私の台湾原住民族研究覚書
Sub Title	Notes on my research on Taiwan's indigenous peoples
Author	三尾, 裕子(Mio, Yuko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2025
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.154 (2025. 3) ,p.215- 229
JaLC DOI	
Abstract	Nearly 40 years have passed since I began field research in Taiwan in 1985. Recently, I had the opportunity to reflect on the topics I studied and the research I conducted during this time. The details of this reflection have been included in Volume 50 of the Annual Report of Social Anthropology published by the Department of Social Anthropology at Tokyo Metropolitan University. Therefore, I will not discuss them here. Instead, in this article, I provide a memorandum account of my involvement in research on Taiwan's Indigenous Peoples, a topic I was unable to discuss in that publication. Specifically, I focus on two themes: "Research on Taiwan's Indigenous Peoples Materials by Ogawa and Asai" and "Oral History Research Related to Indigenous Peoples."
Notes	特集：岡原正幸君・岡田あおい君・三尾裕子君退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000154-0215

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

私の台湾原住民族研究覚書

三 尾 裕 子*

Notes on My Research on Taiwan's Indigenous Peoples

Yuko Mio

Nearly 40 years have passed since I began field research in Taiwan in 1985. Recently, I had the opportunity to reflect on the topics I studied and the research I conducted during this time. The details of this reflection have been included in Volume 50 of the *Annual Report of Social Anthropology* published by the Department of Social Anthropology at Tokyo Metropolitan University. Therefore, I will not discuss them here. Instead, in this article, I provide a memorandum account of my involvement in research on Taiwan's Indigenous Peoples, a topic I was unable to discuss in that publication. Specifically, I focus on two themes: "Research on Taiwan's Indigenous Peoples Materials by Ogawa and Asai" and "Oral History Research Related to Indigenous Peoples."

1. はじめに

1985年に台湾での現地調査を始めてからすでにほぼ40年になる。この間筆者がどのようなトピックについて研究し、調査を行ってきたのかに関して、最近振り返る機会があった。そこで気がついたのは最初の長期調査では当初自分が考えて予定していたテーマではあまりうまく資料が集められないことがあり、むしろその場で出会った様々な事象に触発されて新しいテーマを発見したこと、また、フィールドで調査をすることで、新たな興味深い現象に遭遇して、次なるテーマやフィールドが見つかってい

* 慶應義塾大学文学部教授

く、そんなケースの方が多かったことだ。すなわち、人類学の研究とは、フィールドワークの中で新たな研究テーマやフィールドを発見する、そんなフィールド発見型の研究スタイルだと改めて気がついた。このようなフィールド発見型の研究の経歴については、東京都立大学の社会人類学研究室が刊行している『社会人類学年報』第50号に寄稿させていただいたので、ここではくりかえさない。ご興味のある方は詳細についてはそちらをご参照頂きたい（三尾 2024）。

そこで、本稿では、前掲論文で書くことができなかった、筆者と台湾原住民族¹ 研究との関わりについて記したい。原住民族研究について『社会人類学年報』に書けなかった理由は、一言で言えば、このテーマに出会ったきっかけがフィールドではなく、当時の筆者の職場であったからだ。

2. 小川・浅井台湾資料研究

正確な年は覚えていないが、以前勤めていた東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、AA 研）が北区西ヶ原にあったキャンパスより府中市に移転する計画が進んでいる最中のことであったから 1990 年代末であったのではないかと思う。ある日研究所の図書室の職員の方が私の研究室にお見えになり、図書室の一角に保管されていた数十箱のダンボールの中にある資料を見てほしいとおっしゃった。図書室では職員が見てもその中身が貴重なものかどうかかわからず、必要がなければ移転を機に処分したい、そんなご意向であったと思われる。その方が私を訪ねて来られた理由は、おそらく中身が台湾研究と関係するものである可能性をお考えになったからだと思う。実際、私とそのダンボールの中からいくつかの紙の束を取り出して見たところ、台湾原住民らしい人々が写っている写真や、意味はよくわからないけれども言語に関する調査データをまとめたらしいノート類も見つかった。しかしこれらのものが一体本当に価値があるものなのかどうか、それまで台湾原住民族研究を全くしたことがなかっ

た筆者には判断がつかなかった。そもそもなぜこれらのものが研究所の図書室の片隅に眠っていたのか、それも見当がつかなかった。

当時、研究所内には台湾原住民族研究を専門とする所員はいなかったが、かつては土田滋先生という台湾原住民族言語の研究者がいらっしやったので、土田先生にお伺いしてみることにした。すると、なんとこれらのダンボールの中身は日本植民地時代の台湾にあった台北帝国大学言語学研究室の教授を務めた浅井恵倫教授から寄贈された一次資料であるとのことであった。またこの他にも、浅井教授の前任者であった小川尚義教授が収集された調査資料もかなりの数が含まれているらしいということも確認できた。

そうするとこれらのダンボールを処分するということはもちろんできないことになる。とはいえ、このまま箱の中に入れた状態で保管するわけにもいかない。つまり、中に一体どんな資料が入っているのか、浅井教授や小川教授がどんな研究をしてきたのか、これらの資料を整理することで見えてくるものがあることは十分予想された。また、日本の植民地支配や、戦後の国民党統治の中で、同化政策の影響を受け、大きく変容してしまった台湾原住民族社会や文化のかつての姿を明らかにする上でも、貴重な資料である可能性が否めなかった。土田先生は 1980 年に東京大学に異動されたため、これらの資料が寄贈先の AA 研に残されたというのが実情だったようだ²。これらのことから、残されている一次資料を整理して、研究資源として公開することは非常に意義深いと考えられた。

しかしこれらの資料を筆者一人で整理することは到底不可能だ。そもそも台湾原住民族研究をしたことがない筆者には、例えば写真の一枚一枚が台湾のどこにいる何族の何を写したものなのか、皆目見当もつかなかった。しかし、幸いなことに AA 研は日本学術会議がアジア・アフリカ諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告して 1964 年に東京外国語大学に附置された研究所で、全国の研究者を糾

合して共同研究を行うことが主要な活動であった。ちょうど、20 世紀末から 21 世紀始めにかけての日本では、国立大学の部局間の事務一元化や法人化などが議論されていく潮流の中にあり、共同利用研究所とはいかなるミッションと特色を持った機関なのかが厳しく問われ始めている時期でもあった。そこで、こうした研究資料を研究資源として整理して公開し、興味を持つ国内外の研究者の研究に供することや、研究資料をその由来となったコミュニティに還元することの重要性が共同研究機関の存在意義として強く意識されるようになった。しかし、今では資料のアーカイブ化や公開について研究機関が取り組むことはかなり当たり前のことになっているが、当時はまだ始まったばかりで、何から手を付けてどう道筋をつけていくのかは、手探り状態だった。

そこで、筆者は 2000 年度より所内に設置されていた情報資源利用研究センターのデータベース構築プロジェクトに応募し、これらの資料を本格的に整理、保存し、合わせて資料の電子化、データベース化を行って、公開することを目指すこととした³。またこの作業のベースとしては、研究資料の 1 点 1 点についての調査時期、調査地点、内容などを精査する必要があった。そこで、筆者は研究所の共同研究プロジェクトに応募することを思いついた。共同研究の代表者は、研究所発足以来所員でなければならなかったが、この頃研究所の共同利用性を向上させるために、研究所外の研究者に共同研究を企画し、応募していただくという取り組みを始めることになっていた。そこで、土田先生にお願いして代表者になっていただき、所内外の十余名からなる「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」と題した研究で共同研究プロジェクトに応募していただいた。研究所としては、過去の研究者の一次資料を保管、整理して公開することは、研究所の存在価値を高める上で重要であると判断し、同プロジェクトを、外部研究者を代表者とする第 1 号のプロジェクトとして採択した。こうして、2001 年 10 月から共同研究が開始された（2003 年度で終了）。このほ

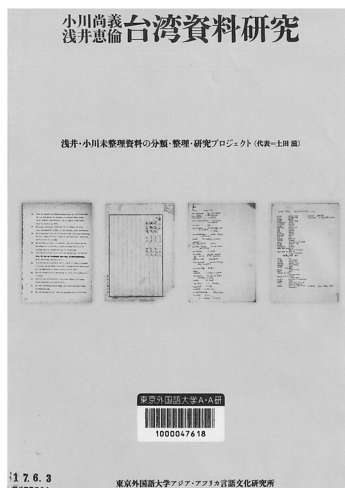


写真 1 『小川尚義浅井恵倫 台湾資料研究』表紙

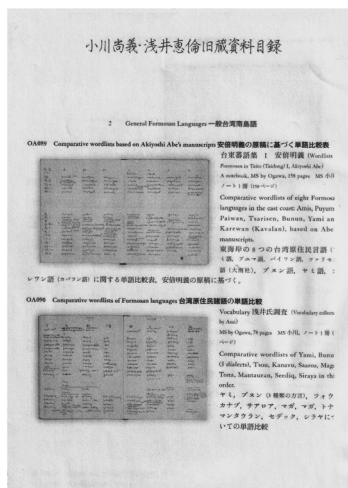


写真 2 『小川尚義浅井恵倫 台湾資料研究』14 頁 原住民言語のフィールドノート目録

か、2001 年 7 月からは、台湾の中央研究院語言学研究所の李壬癸教授を代表として、同研究所、南山大学人類学研究所、AA 研による国際共同研究プロジェクトが台湾の財団法人蒋経国国際学术交流基金会から助成金を頂くこともできた。同プロジェクトの李教授は、台湾原住民族言語研究の泰斗であり、本プロジェクトにおいて、小川、浅井両教授が残した言語資料のほぼすべての同定作業を担当して下さった⁴。

数年間の作業、研究を経て、「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」を編者として 2005 年に『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』が AA 研より出版された(写真 1, 2)。研究のプロセスの詳細などはそちらを参考にされたい。本書の主要な内容は、上記の諸プロジェクトを通じて分類整理されたノート、写真、音声、動画などについての目録、解説である。また、写真とノートに関してはオンラインデータベースも作成した(現在



写真3 2005年「臺灣資料 テキスト・音・映像で見る台湾 一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として」において頒布した冊子資料

は残念ながら閉鎖されている）。なお、上記の報告書自体は、現在絶版になってしまっているが、近日中にオンラインで公開されることが予定されている。

目録を通して小川教授と浅井教授が残した資料は国内だけではなく台湾においても広く台湾原住民族研究に関心を持つ研究者に知られるところとなり、研究資料の複製についての申請書や許諾状のフォームもこれを機に整えられ、以後多くの研究者の利用に供されている⁵。また、研究資料の展示（2005年「臺灣資料 テキスト・音・映像で見る台湾 一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として」）をAA研内で行っただけではなく（写真3）、国立民族学博物館での巡回展（2006年「東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 臺灣資料展 一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として」）（写真4）、また写真資料を中心に台湾の南投県にある原住民族関係の野外博物館である九族文化村での展覧会（2006



写真4 国立民族学博物館での巡回展の一環で行った映画会「サヨンの鐘」のチラシ

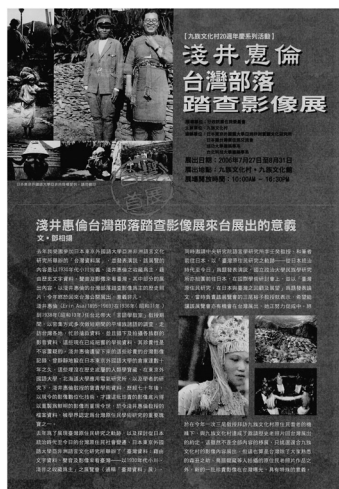


写真5 台湾の九族文化村で開催された「浅井恵倫台湾部落踏査影像展」のチラシ

年「浅井恵倫台湾部落踏査影像展」も行われた(写真5)。国立台湾歴史博物館とは2011年に、小川浅井資料のうちの写真資料、音声データ、無声フィルムについて、博物館で閲覧利用していただけるように協定書を交わすこともでき、一定程度、当初の目的は果たせたと考えている。協定書の調印式の時に、資料のお披露目がされたが、会場には、当時の写真に写っている原住民の子孫と考えられる方々が来場し、在りし日の先人たちの姿を感慨深げにご覧になっていたのが大変印象的だった(写真6)。

3. 原住民に関係するオーラルヒストリー研究

台湾原住民族に関して筆者の本業ともいえる漢族研究との連続性の中で新たにアイデアが浮かんだのは、オーラルヒストリー研究だった。筆者は2002年頃より台湾における植民地主義、脱植民地化についての研究を



写真6 2011年11月18日 国立台湾歴史博物館にて、協定書の締結式終了後の記念撮影
前列右から4人目は、呂理政国立台湾歴史博物館館長（当時）、その左隣で筆者、赤いベストを着ているのが台湾原住民の方々。

開始したが、その一環で、台湾において日本植民地時代を経験した方々にライフヒストリーを伺うことで、当時支配者と被支配者との間に日常生活の中でどのような相互行為関係があったのかなかったのかを考察してみたいと考えた。きっかけは、台湾研究仲間の間で、日本台湾学会で何らかのテーマでパネル発表をしようという話になった時に、私たちがフィールドで当時よく台湾の人々から日本時代話を聞いていることに気が付き、彼ら彼女らが日本時代について何をどのように私たちに語りたいと思っておられるのかについて考察してみてもどうか、という話になった。企画は、2003年6月14日に関西大学での分科会「抵抗でも協力でもなく：日本植民地統治期に対する歴史認識」として実現した。その後、その時の登壇者を中心にして科研費などを獲得して調査研究を行い、成果も論集の形でい

くつか発表してきた（五十嵐・三尾編 2006; 植野・三尾編 2011; 三尾・遠藤・植野編 2016; 三尾編 2020; 三尾編 2022; Mio ed. 2021 等）。しかし、その多くは、台湾の漢民族あるいは台湾での生活経験のある日本人を対象としたもので、原住民の人々を対象としたものは非常に少なかった。

また、植民地に関するオーラルヒストリー収集からは、学校など社会制度的に内地人と被支配者が必然的に接触する場面を通して両者の関係を読み取るケースが多かったが、日ごろの日常生活の中での接触がどのような場面でどの程度あったのかについては、いまだ解明されていないことがあるように感じられた。

そこで、原住民族の方々や、原住民族と日常的に接触する機会のあった日本人（内地人）の方にお話を伺うべく、情報提供者探しを行った。その際にお世話になったのが所澤潤先生（現大正大学心理学部教授）である。所澤先生は、日本教育史の専門家であり、これまで数々のオーラルヒストリーを採集され、出版もされてきている。先生は非常に寛容に筆者の考え方を認めてくださり、客家地域でのご調査の関係でご縁のあった方を通して G 氏（サイシャット族）をご紹介くださり、二人での共同調査が始まった。G 氏は 2008 年の調査開始時は推定 83 歳という高齢だったが、穏やかな性格で、かくしゃくとした方であった。私たちの聞き取りは、2008 年から 2012 年にかけて計 8 回にわたった。たいていの場合、朝、台北から日本の新幹線技術も使われている台湾高铁で新竹に行き、そこからタクシーで新竹県の山中の G 氏のご自宅に向かい、山の食材などが使われたお昼ご飯をごちそうになりながら夕方近くまでじっくりお話を伺った。夕方になると、G 氏が自家用車で山道を運転して私たちを乗せてくださり、竹東の回転ずし屋で夕食をご一緒してそこでお別れする、ということが多かった。御歳を考えれば、G 氏のパワーに驚くばかりだったが、第 6 回高砂義勇隊に参加し、マニラからラバウルに入り、終戦をソロモンで迎えたという若いころからの過酷な経験の中で、強靱な体力と精神力を養ったの

かもしれない。この方のお話で印象深かったのは、当時新竹の山の中で知り合った日本人の勧めで、早稲田大学の通信制教育を受けたというお話だった。

原住民の方へのインタビューでは、もうお一人、台東県のブヌン族の T 氏にもお世話になった。この方については、石垣直先生（現沖縄国際大学教授）にご紹介いただいた。T 氏のお宅には 2010 年から 2014 年にかけて 6 回ほどお邪魔した。台湾の原住民族言語に興味を抱いていた東京外国語大学で博士号を取得した林虹瑛氏とお邪魔することが多かったが、ブヌンのしきたりとして、客人を家に泊めないことはできないということで、私たちはいつも滞在する日数分の食料を台東で仕入れ、滞在期間中は私たちが炊事係を担当してお話を聞くというスタイルでインタビューをさせていただいた。T 氏は G 氏より数歳若い方だったが、幼少時に総督府の政策で強制的に山から平地へ移住させられたことで日本に反感を持つ父親のもとで育った。しかし、教育所（山地の先住民の子どもたちに初等教育をほどこした学校のこと）で出会った先生（警察官が兼ねていた）に大変よくしていただいたそうで、卒業後も駐在所の手伝いの仕事などを世話してもらった。終戦後連絡が取れなくなったが、その恩をずっと感じ再会を念じているという方であった。このため、筆者は T 氏の強い思いに応える道義的責任を感じた。台北で総督府関係の資料を探したり、T 氏と近隣の戸政事務所（台湾で、戸籍や住民票に類する戸口簿を管理している事務所）を回った結果、警官の方の日本時代の記録を発見して、日本にいらっしゃるご遺族を探し当て、再会の機会を作ったことは筆者にとっては大変思い出深い経験になった（三尾 2013, 2014）。

原住民族と接触経験のあった内地人については、所澤教授との共同調査で H 氏と移川子之蔵元台北帝国大学教授（1884-1947）の御子息の J 氏にお世話になった。

H 氏への聞き取りは、2008 年から 2011 年にかけて 12 回ほどおこなわ

れた。また、このほかにも成果の公開の方法などをめぐる打ち合わせのために別途 2~3 回ほどお邪魔した。ご自宅は眺望の良い高台に位置していて、またご自宅の中にはインドネシアなどでお求めになったと思われる多くの美しい置物などがあり、居心地の良い空間だった。H 氏は日本時代の新竹州の山中に赴任した警察官の父親とともに幼少期を山で過ごしたという方で、その当時は毎日のように原住民と遊んでいたという。終戦後日本に引き揚げてから、デザインの道に進まれ、工業デザイナーとしてご活躍されたが、ご自身のデザインのセンスは幼少期の原住民族の衣装や文様から多大な影響を受けたと述べられた。

J 氏への聞き取りは、2010 年から 2014 年にかけて計 20 回以上行われた。場所は J 氏が開いておられる水彩画の教室の会場として使用しておられた公民館を毎回借りる形式で、氏はご自宅から私たちのインタビューのための資料をリヤカーに載せて引っ張ってこられるという独特なスタイルだった。J 氏は台北高校を卒業後、日本に戻り東京帝国大学に進まれた方だが、それまでの多くの期間を台北の「昭和町」と呼ばれた内地人の主に教育関係者が住んでいた住宅で育った方だ。この方によれば、家に 2 名の原住民男性を住まわせていたという。また父の子之蔵氏のお仕事についてもしっかりとした記憶を保持されていた。なにより、ご自宅に子之蔵氏が台湾からの引き揚げ時に持って帰られた一次資料を保管されていた。J 氏のオーラルヒストリーをお伺いする一方で、これらの資料を拝見しながらお父様の思い出話などをお伺いすることができた。

以上、オーラルヒストリー関係では、4 名の方のお話を伺ったわけだが、正直に告白すると、これらの方々の個人史や移川教授の調査資料についてはまだほとんどまとまった成果を出せていない。T 氏に関連して、2 本のエッセイ（三尾 2013, 2014）を、そして移川子之蔵教授の資料に関して森丑之助の書簡から見える台湾原住民研究の転換点についての小論（所澤・三尾 2012）を書いた程度に過ぎない。今後、時間の許す限り、これらの

調査で得られたデータをもとに、オーラルヒストリーの資料整理と公開、また原住民族と内地人との関係性についての考察を深めていかなければならないと考えている。

4. おわりに

今回、『哲学』が退職記念号の特集を組むこととなり、筆者はこれまであまり書いてこなかった原住民族研究と筆者のかかわりについて振り返ってみることにした。他方、教育面について振り返ってみると、筆者が指導した院生の中にはなぜか、漢族研究者より原住民族研究者の方が多かった。従って彼ら彼女らに関しては、指導したというよりは、こちらが一緒に学ばせてもらったといったほうが正しいだろう。今回特集号を組むにあたっては、筆者の指導学生の中から、東京外国語大学で大学院教育を担当した最も初期に受け持った宮岡真央子氏（現在福岡大学教授）と、慶應義塾大学に赴任してから受け持った最後の院生と言ってもよい益田喜和子君（慶應義塾大学社会学研究科後期博士課程）に執筆していただくことで、原住民族研究の特集とすることにした。

なお、筆者が慶應で主任指導教員として指導した他の後期博士課程の学生の中に、日本の宗教研究の院生が3名、中国大陸の民間信仰（民間仏教）研究の院生が1名いる。この4名とは、2024年7月の三田社会学会でシンポジウムを企画、開催する機会に恵まれた。成果は『三田社会学』に公表される予定である。併せてご参照頂ければ幸いだ。

最後に、志半ばで逝った高橋萌君にも言及したい。彼女は、慶應義塾大学文学部東洋史学専攻を卒業後、慶應義塾大学大学院社会学研究科に進学した学生で、筆者の慶應における最初の主指導の院生だった。当初はカンボジアの華人研究を志していたが、途中から台湾における外国籍の介護労働者に興味を覚え、後期博士課程進学後は台湾での長期フィールドワークも行っていた。コロナ禍が始まって一時帰国を余儀なくされていたが、コ

ロナ明けを見据えながら論文作成も精力的に行っていた最中、急な病に倒れることになった。彼女の博士論文を目にすることはできなかったのは悔やまれるが、彼女も私の大切な学生の一人であることから、ここに特に記しておきたい。彼女の天国での安らかな日々を願うばかりである。

註

- ¹ 台湾の先住民族は、中華民国憲法において「原住民族」と規定されているため、本稿においても、オーストロネシア系の諸民族の総称として、原住民族、そして個人については原住民と表記する。
- ² 当時、筆者は不勉強にも、既に土田先生らがこれらの資料の一部を用いて研究成果を発表しておられることを知らなかった。詳細については、三尾（2005: 5）を参照されたい。
- ³ データベース化にあたっては、当時所内でこの方面に最も先進的な知識を持っておられた豊島正之助教授（現上智大学名誉教授）の助力を得られたことが大きかった。
- ⁴ 本プロジェクトでは、あわせて浅井教授が南山大学に寄贈された資料についても調査を行った。
- ⁵ その詳細は本特集の宮岡論文において紹介されているので、あわせて参照されたい。筆者自身は、彼らが遺した資料群の中に内地人の警察官が使用していた原住民言語教科書が数冊見つかったことから、これらを用いて日本統治時代の内地人が台湾原住民をどのようにまなざしていたのかを考察する研究を行った（三尾 2009, 2011）。

参 考 文 献

浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究プロジェクト編

2005『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

五十嵐真子・三尾裕子編

2006『戦後台湾における〈日本〉——植民地経験の連続・変貌・利用』風響社。

植野弘子・三尾裕子編

2011『台湾における〈植民地〉経験——日本認識の生成・変容・断絶』風響社.

所澤潤・三尾裕子

2012「台湾の人類学研究における「バトン・タッチの儀式」——1926年4月の森丑之助から移川子之藏への手紙」『台湾原住民族研究』16: 123–138.

三尾裕子

2005「前言——小川・浅井資料とAA研」浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究プロジェクト編『小川尚義 浅井恵倫台湾資料研究』pp. 5–10 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

2009「『蕃語編纂方針』から見た日本統治初期における台湾原住民語調査」『日本台湾学会報』11: 155–176.

2011「警察官用原住民語教科書に見える原住民へのまなざし」植野弘子・三尾裕子編『台湾における〈植民地〉経験 日本認識の生成・変容・断絶』pp. 259–299 風響社.

2013「ある古老との出会いから考えたこと」下村作次郎ほか編『台湾原住民族の音楽と文化』pp. 50–52 草風館.

2014「『体験』の語りを伝えていくこと——約70年の時を越えた「再会」を通して考える——」西井凉子編『人はみなフィールドワーカーである 人文学のフィールドワークのすすめ』pp. 244–261 東京外国語大学出版会.

2024「フィールド発見型のフィールドワーク——ボーダーを越えて研究すること——」『社会人類学年報』50: 65–77.

三尾裕子編

2020『台湾における〈日本〉認識——宗主国位相の発現・転回・再検証』風響社.

2022『台湾で日本人を祀る——鬼（クイ）から神（シン）への現代人類学』慶應義塾大学出版会.

三尾裕子・遠藤央・植野弘子編

2016『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』慶應義塾大学出版会.

Mio, Yuko ed.

2021 *Memories of the Japanese Empire: Comparison of the Colonial and Decolonisation Experiences in Taiwan and Nan'yo-gunto*, Routledge.